

デジタル社会の本質を捉え、より良い未来を歩んでいくための10冊

デジタル社会を正しく理解し、
 明るい未来を築くためにはどうすればいいのでしょうか。
 今号で紹介した事例の理解を深める10冊を選びました。



6 『社会的処方』 —孤立という病を地域のつながりで治す方法—

近年、社会的孤立による高齢者の健康障害が課題となりつつある。それに対し、本書が説くのは地域コミュニティへの参加、すなわち「社会的処方」のメリットだ。日・英の事例分析を基に、個々の活動が誰かの「お薬」になるという発想を提示。その考えは「マチマチ」にも通じ、シニアにとってのSNSの価値を気付かせてくれる。

西智弘=編著
 学芸出版社／2020年



7 『清華大生が見た最先端社会、中国のリアル』

山谷氏の論考のテーマであるシニア層とは対極の、チャイナニュースの現状について、清華大学に在学した日本人学生が分析する一冊。「80後」「90後」世代が考えるデジタル社会の形、世界一のアプリ大国での日常、統一試験「高考（ガオカオ）」や留学組「海亀（ハイグイ）」に代表される教育事情、彼らの若者の価値観の違いまで論じた内容は、リアルな中国社会が垣間見える。

夏目英男=著
 クロスメディア・パブリッシング／2020年



8 『スマホを捨てたい子どもたち』 —野生に学ぶ「未知の時代」の生き方—

霊長類研究で名高い著者は、スマホ依存やSNS疲れの原因は、人間本来のつながりが失われたことにあると言う。過度の情報化により「好き」という自然な感情も分析せずには理解できなくなった私たちは、生物としての自覚を取り戻せるのか。ゴリラ社会を見つめることで、言葉と身体、個と集団、ヒトの未来と幸福を考える警告の書。

山極寿一=著
 ポプラ新書／2020年



9 『スマホ脳』

「人間の脳はデジタル社会に適応していない」という衝撃的な警告を発した、スウェーデンの精神科医による世界的ベストセラー。スマホやSNSには、報酬系という脳の神経を刺激して依存させる仕組みがあることを、最新の研究から明らかにしている。集中力の低下や心の不調、孤独感の強まりなど、依存による弊害を認識することは、スマホとの向き合い方を再考するきっかけになるかもしれない。

アンデシュ・ハンセン=著 久山葉子=訳
 新潮新書／2020年



10 『フィルターバブル』 —インターネットが隠していること—

今号の対談で、佐久間氏がデジタル社会の問題として指摘したフィルターバブル。ユーザーの嗜好に合わせた情報を提供する技術により、知らないうちに偏った情報に囲まれやすい現代社会の危険性を、いち早く指摘したのが本書だ（原書は2011年）。インターネットの歩みや危険性、未来の展望を考える上で、本書を読み直す意義は大きい。

イーライ・パリサー=著、井口耕二=訳
 早川書房／2016年



1 『ソーシャルメディア四半世紀』 —情報資本主義に飲み込まれる時間とコンテンツ—

綴られるのは、2001年以降の日本のソーシャルメディアの歴史。SNSだけでなく、電子掲示板やレビューサイトなど、一般の人が自由に発信できる代表的なサイトを取り上げ、利用者のデータと運営側の構想、収益率などを組み合わせ、独自の分析を重ねる。ネット史の観点から、21世紀の日本の変遷を振り返るという意味でも、興味深い良書。

佐々木裕一=著
 日本経済新聞出版／2018年



2 『アフターデジタルセッションズ』 —最先端の33人が語る、世界標準のコンセンサス—

本誌126号に登場した藤井保文氏の『アフターデジタル』シリーズの続編。デジタル先進国で活躍する33人のリーダーによる14本のトークセッションがまとめられる。リアルとデジタルが融合する時代で重要なのは、テクノロジー自体ではなく、掲げるビジョンの共有にあるという視点は興味深い。今号で取材した塩野氏のセッションも収録。

藤井保文=監修
 日経BP／2021年



3 『チャイナ・イノベーション2』 —中国のデジタル強国戦略—

政府と民間プラットフォーム一体の「デジタル・社会ガバナンス」を強力に牽引する中国。コロナ禍で効果が実証された「健康コード」、多様なフィンテック戦略、アリババやアントグループ、データ戦略の中核を担う新星バイトダンスの動向まで、世界に類のない「イノベーション駆動型国家」のホットな今を読み解く。

李智慧=著
 日経BP／2021年



4 『思考からの逃走』

文字認識、自動翻訳、さらに適職判定まで、近年は精度を上げたAIの利用が進む。しかし、思考や意思決定といった人間本来の能力まで外部化することに、一抹の不安を感じざるをえない。情報学研究者の著者が問うのは、AIなどのデジタル技術に多くを委ねた社会の行く末。不安な未来を描きつつ、思考にこそ人間の価値があると提示する本書は、ある意味希望の書と言えるかもしれない。

岡嶋裕史=著
 日本経済新聞出版／2021年



5 『デンマークのスマートシティ』 —データを活用した人間中心の都市づくり—

ビッグデータをガバナンスに積極活用し、暮らしをアップデートする仕組みが確立しているデンマーク。都市生活のあらゆる面に実装されたイノベーションを紹介しつつ、背景にある文化や国民性、フラットな社会構造、独自の教育制度にも言及する本書は、北欧型システムのローカライズとしての日本型デジタル改革の可能性を提示してくれる。

中島健祐=著
 学芸出版社／2019年

